# 編集後記


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2023-03-20<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4910 |

# 編集後記

長かったコロナ禍も少しずつ終幕に近づいている、と思いたい今日この頃である。昨年、一昨年と本欄にて学科の状況をお伝えしてきたが、本号では「コロナ禍におけるリモート教育に関する覚書」と題し、この三年間の都度の状況についてまとめさせていただいた。この作業を行なってみて、人間（或いは人間である私）は如何に忘れやすい生物であるかということを実感した。「喉元過ぎれば熱さ忘れる」の諺ではないが、辛かったこと、嫌なことは自然に記憶の奥底に沈んでいき、都合のよい記憶として書き換えられてしまう。毎年、そのときの状況を書き留めていたからこそ、客観的な記録として残るものなのか。恐らく時々の辛い記憶を正確に抱えたままでは精神がやられてしまうのであろうし、正常な精神のまま生きていくための防御反応なのであろう。

かつて、国文学科長を務められた谷垣伊太雄先生が昨年二月にお亡くなりになった。私は平成元年に本学に着任したが、以来二〇年に渡り先生から大学教育について学ばせていただいた。ご退職後も、学内の公開講座や学外の講演会にしばしば来られては、温かい言葉を掛けてくださった。うちの子どもにも時折、丁寧な手紙とともに本やお菓子を送ってくださった。いつも温厚で優しかった先生の笑顔を今でも忘れることができない。コロナ禍以前であれば、お葬式に参じることが出来たはずなのにと悔やまれる。

本号では、白川哲郎教授、嶋崎さや香准教授、「あせごのまん」こと奈良﨑英穂教授の三名にご投稿いただいた。私のものも含め、いずれも今世に問うべき論考ばかりである。令和五年度が良い年になることを願いたい。

（国文学科長　田原広史）